ビデオ新発見！

かわなか のぶひろ

ビデオの楽しい使いかた講座

新発見！

ビデオの楽しい使いかた講座

かわなか のぶひろ

江苏工业学院图书馆
藏书章

ホームビデオ用のエフェクターでつくった特殊効果。

かわなか のぶひろ

1941年、東京生まれ。小学生のときから映画館にいりびたり、中学校卒業後、さまざまな仕事につきながら映像作家をめざす。1960年代はじめから日本の個人映画の先駆的存在として活躍、1970年に、ビデオとであう。現在、東京造形大学助教授、イメージフォーラム映像研究所講師。ビデオの代表作に、「プレイバック」シリーズ、「キック・ザ・ワールド」など。著書に、「ビデオ・メーキング」(フィルムアート社)、エッセイ集「猫日記」(皓星社) 他がある。

写真提供・協力
朝日新聞社／イメージフォーラム／WAVE／旺文社キャンパスビデオ編集局
オフィスシナジー／株式会社伸樹社／株式会社日立製作所／佐藤克巳
ソニー株式会社／株式会社ダゲレオ出版／丹野清志／日本ビクター株式会社
日本放送協会／毎日新聞社／松下電器産業株式会社

どんぐりブックス㉓
ビデオ新発見！
ビデオの楽しい使いかた講座

1990年7月　第1刷©

著　者　かわなか のぶひろ
発行者　田中治彦
編　集　村地春子
発行所　株式会社ポプラ社　〒160 東京都新宿区須賀町5
電話(営業)03-357-2211 (編集)03-357-2216
振替東京4-149271　(ご注文)03-978-0051
印　刷　暁美術印刷株式会社　(FAX)03-924-5341
製　本　石毛製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。
ISBN4-591-02921-2
N.D.C.740/190P/20cm

埼玉県立熊谷図書館
移動
埼玉県立図書館
印
書

はじめに

この本を手にする読者は、これから、ビデオをつくってみようとおもっている若い世代だろう。

なかでも十代の読者は、生まれたときからカラーテレビで育ち、ぼくのように、テレビが、かつて白黒だったことなんか、まったく知らない世代だろう。

ぼくの経験からいうと十代は、人生のなかで、いちばん感受性が豊かで、いちばん創造力にあふれているときだ。そして、いちばん冒険できるときなんですね。

けれどもそれが、そんなにたいせつなことだとは気づかないでいるときでもあるんです。

ぼくも十代のときは、早くおとなになりたい、おとなになりたいと、しじゅうそればかりかんがえていた。いちどでいいからおとなの価値観で、世の中とわたりあってみたいと、おもいつづけていた。

なにしろ〝こども〟という字がいけません。フロ屋へいっても、映画館へいっても、おとなは「大人」で、こどもは、子供ではなく「小人」と書かれていた。それをみるたびに、ぼくがなんでコビトなんだ！　と感じたものだ。値段が安いことですら、なんだか一人前にあつかわれていないようで、いちゃもんをつけたくなった。ずいぶん背のびをしていたんだね。

そんな若い世代にむけて本を書くということは、なんだかおそろしいような気がする。十代の少年、少女たちのために本を書くというのも、ぼくにとっては初めての経験だ。

けれども、まあ、そのあたりはあんまり気にしないで、ぼくも十代になった気持ちでスタートしてみよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

中学生にマイクをわたして、かってにおしゃべりをしてもらったインタビュー・ビデオ。はなしはじめたらもうとまらない！

もくじ

はじめに　1

第一章　7

1　どんな機材がいいか、いつもきかれる　8
2　ビデオでアルバムをつくってみよう　12
3　ビデオらしさってなんだろう　30
4　さんぽビデオで新発見　40
5　よそいきじゃなく〝ふだん着〟で　51
6　グループでビデオを遊ぶ　63
7　ビデオ・インタビューはふれあいのドラマ　78
8　ビデオはどこからきたんだろう　96
9　ビデオはこんなにおもしろい　108

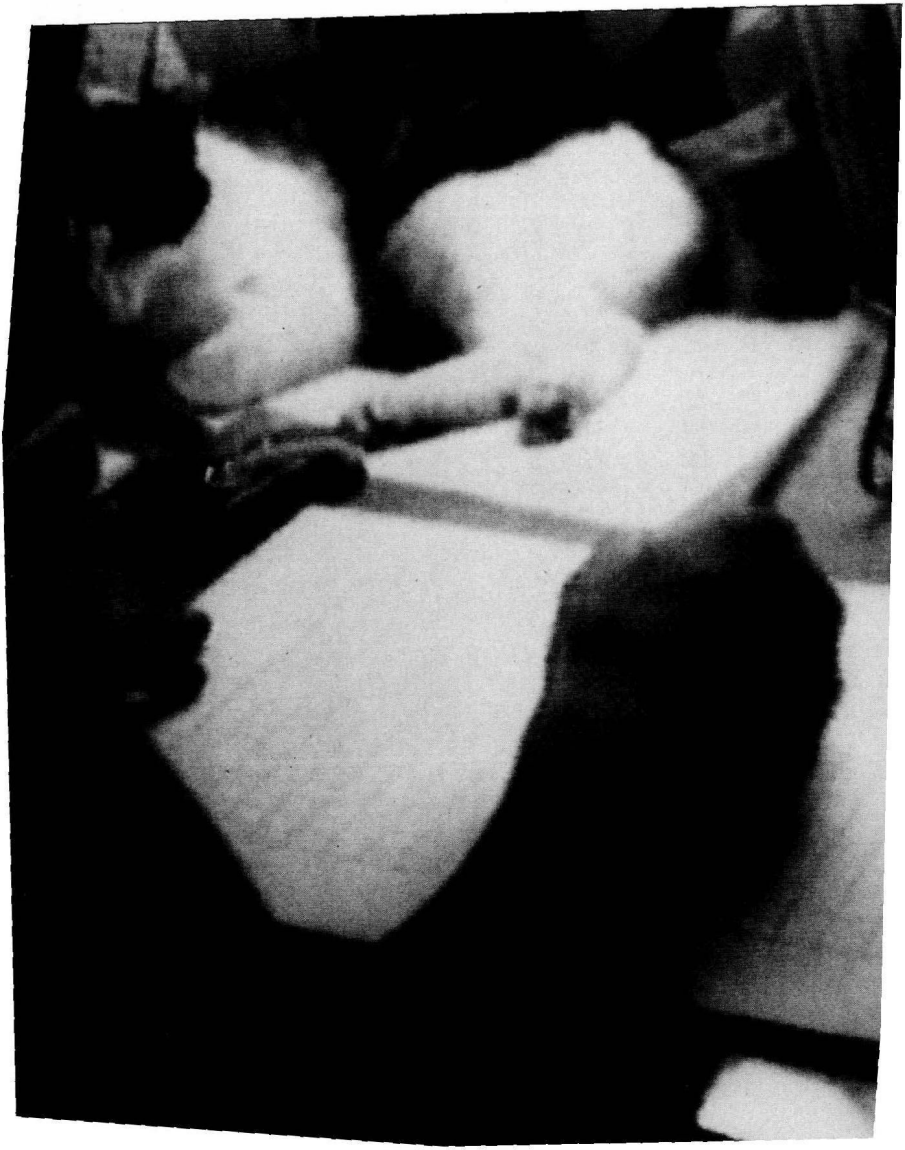
10　コミュニケーションってすばらしい　129
11　ビデオ・アートってなんだろう　139
12　編集はもうひとつのビデオカメラ　154

第二章　169
1　ぼくのことを少しはなしてみようか　170
2　ぼくがビデオを手がけるようになったわけ　173
3　最初のテープはみんなへただった　181

あとがき　187

表紙撮影　亀山哲郎
図版・カット　中尾純子

第一章



1　どんな機材がいいか、いつもきかれる

ビデオで作品をつくるにあたって、いったいどんな機材が必要なのかアドバイスしてほしい、という質問をしばしばうける。

「そうだね、はっきりしていることは、いちばん新しい機種がいちばんいい」と、いつもこたえることにしている。

読者も、自分で買うわけはないとおもうけど、なにがいいのかは気になるだろう。自分の家にあるビデオは、もしかして作品をつくるのにむいてないんじゃないか、なんてかんがえるかもしれない。

ほんとうのところをいうと、どんな機種でもいいんだ。撮れさえすれば、たとえ数年前のモデルでも、いっこうにかまわない。カメラとデッキがわかれている旧式のビデオでも、ちょっとの重さと、あつかいにくいところさえガマンすれば、撮れないな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

んてことはないんだから……。

もちろん新しいモデルは、それ以前のものよりも使いやすいし、画面の質も、音声の質もかなり向上している。ビデオにかぎらずエレクトロニクスの世界は日進月歩なのだ。今日のものより明日のもののほうが、よりよいにきまっている。

たとえば冷蔵庫をかんがえてみよう。

いま、読者の家にある冷蔵庫はどんなモデル(型)だろう。たぶんドアが二つか三つついている大型の冷蔵庫だろう。お母さんにきいてみてほしい。この冷蔵庫になる前のモデルを。きっとドアがひとつのモデルだったにちがいない。けれど、ドアがひとつの場合、ドアをあけるたびに、なかの冷えた空気が外のあたたかい空気と、いちどにいれかわってしまう。これじゃあ夏の暑い日なんか、なかが冷える間もないよね。ジュース一本とりだすたびに、なかの空気と外の空気がいれかわってしまうんだもの。

そこで、新しいモデルが発表されると、前の冷蔵庫が使えなくなったわけではないのに、より効率のよいモデルに買いかえることになる。

読者の家の冷蔵庫も、きっとそうして新しいモデルになったんじゃないかな。

冷蔵庫の場合は、まず、冷やす機能が優先されるけど、ビデオはどうだろう。ビデオの古いモデルは、重いし、画質もいまいちものたりないところがあるだろう。でも撮る機能がこわれてさえいなければ、効率が悪いなんてことはない。

冷蔵庫はものを冷やすのが目的だし、せんたく機はものをあらうのが目的だ。じゃあビデオはなにが目的なんだろう。

ビデオは撮ることさえできれば、ほかの機能は、とりあえず必要ない。なぜなら、冷蔵庫の場合は、ものを冷やす機能のみの使いかたしかできないけれど、ビデオの場合は、画質だけがすべてではないんだね。このことは、あとのほうでくわしくはなすけど、ビデオは冷蔵庫とちがって、たったひとつの使いかたしかできないわけではないんだ。

自分の背なかを映してみるだけだって、まるで天地がひっくりかえったような経験を味わうことができる。こんな使いかたなら、どんなに古いモデルだって、じゅうぶんに役にたつだろう。また、家庭のなかで伝言板のかわりに使う使いかただって、機種や性能のちがいはさして関係ないよね。

ビデオが他の電気製品と決定的にちがうところは、使う人しだいでいろんな使いかたが生まれてくるところなんだ。

たとえば、電気がまは、ごはんをたくという用途以外に使いかたはないだろう。そうじ機はそうじをするためだけ。せんたく機はせんたくをする用途のみ。テレビだって、よそからおくられてくる情報を、一方的にうけるだけ。それにくらべるとビデオは、使う人の個性を、まるで鏡のように映してしまうメディアなんだ。だから、ふつうの家庭電化製品とはちょっとちがうんだね。

というわけで、ぼくは、どんなモデルだっていいってこたえるし、むろんいちばん新しいものが、いちばんいいにきまってるってこたえることにしているんだ。

だから、ここでは、機材の解説や、機種の評価にはふれないことにしたい。もしもそれが気になるならば、メーカー各社のカタログをとりよせて、自分で研究してほしい。もっとも、今日のところは究極のモデルであっても、明日はそれを追いこすモデルがでてしまうから、カタログ遊びはほどほどにしといたほうがいいとおもうよ。

2　ビデオでアルバムをつくってみよう

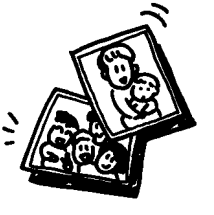
ビデオカメラを持ったら、まず最初にやってほしいことがある。

それは、自分のアルバムをつくることだ。

お父さんやお母さんが撮影してくれた、赤ん坊のときからのスナップ写真。幼稚園や小学校の記念写真などなど、きっとたくさんあるにちがいない。そんな一枚一枚を、ビデオカメラの目で、もういちどまじまじとみてみよう。

動かない写真を撮るなんてつまらない、とおもってる読者がいるかもしれないね。けれども、いきなりビデオを持って外へでても、たぶん被写体にふりまわされてしまうだろう。車が走ると車を撮り、犬が歩くと犬を撮るといった、被写体まかせのビデオになってしまうにちがいない。

なにを、どう撮るか、というトレーニングのためには、まず、ビデオカメラの目を



理解しなければならない。

目の位置にカメラをかまえて、そのまま街を歩いても、肉眼でみたようには撮れっこない。カメラのレンズというもうひとつの目を、肉眼のように使いこなさなければ、肉眼でみたようには撮れないのだ。

人間の目は、いつも素早いスピードで動いている。カメラにたとえるなら、ズーム・レンズみたいに、みたいものを素早くアップにしたり、ピントを調節したりしている。だから、おおぜいの人のなかから、すぐに友人の顔だけをえらびだしたりできるんだね。

カメラの目は、もちろんそんな機能を持っていない。おおぜいのなかからひとりの顔をえらびだすためには、ズーム・レンズを使って寄ってやらなければならない。ピントもあわせてやらなければならない。

最近では、ほとんどのカメラがオート・フォーカス（自動焦点装置）になっているけど、それだって、人間の目のように、みたいとおもったものだけに素早くピントをあわせる、なんてことはできないだろう。レンズの中心にみたいものを持ってこなけ

ればならない。

たとえば、一枚の記念写真をとりだしてみよう。小学校の入学記念に撮った写真ならば、おおぜいのクラスメイトが、きっと緊張した表情でならんでいるだろう。

それをそのままビデオで撮っても、肉眼でみるようには撮れていない。肉眼ならば、おおぜいのなかから、自分の顔や、したしい友人の顔をえらびだすことができるけれど、カメラの目は、全体をみているだけなのだ。自分の顔をみるときは、ズーム・レンズなりクローズアップ・レンズを使って、自分の顔だけに寄ってやらなければならない。つまり肉眼でみるときのように、カメラに指示しなければならないのだ。

これは写真を撮るときばかりじゃない。外でビデオを撮るときも、全体をみたり、部分にアップしたりして、肉眼でみるような状態をつくりださないと、ただ全体が映っているだけのダラダラした映像になってしまう。テレビの歌番組が、もしも歌手の全身しか映さなかったら、みていてきっとたいくつしてしまうだろう。

ビデオ・アルバムをつくるときも同じこと。歌番組のように、一枚の写真の全体を撮ったり、部分に寄ってみたりしなければ、みるほうはたいくつしてしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.